
《論 文》

竹富島におけるツーリズムの展開と新来住者たちの移住物語（その1） — 「観光化する島」・竹富島の一員となることの意味を考える—

内 田 司

要 旨

経済のグローバル化にともなう地域的不均等発展問題のひとつとして、消滅の危機に直面している「限界集落」の再生問題がある。また、それは、地域社会学の重要な研究課題ともなっている。そこで、著者も、厳しい状況に直面する中で何とか再生しようとする活動が展開されている地域社会を訪れ、再生の方途を探ることを研究課題のひとつとしてきた。そのフィールド・ワークの中でひとつの気づきがあった。それは、地域社会再生の動きが起こっているところでは、多くの地域社会で、都市から新しく移り住む人たちが数多くおり、さらに実にさまざまな形で地域社会再生の活動で活躍しているということである。この気づきから言えることは、都市からの新来住者たちが厳しい状況に直面している地域社会再生において発揮している力と役割とは何かについて明らかにすることは、地域社会再生研究の大切な課題ではないであろうかということである。また、厳しい状況に直面している過疎地や「限界集落」と呼ばれる地域社会に移り住もうとする人たちが数多く存在するのは何故か、またその意味することは何かということも地域社会再生の社会学の重要な課題であるように思われる。さらに、この課題は、現代社会の私たちのライフスタイル論と密接に関係しているように思われる。本稿は、そうした課題意識をもちつつ、地域社会再生活動にコミットしてきた、またはコミットしている新来住者研究の第1歩を、沖縄県竹富島を事例として踏み出そうとするものである。

キーワード：新来住者、出会い、地域コミュニティ・アイデンティティ

はじめに

経済のグローバル化にともなう地域間不均等発展の問題解決の課題は、これまで地域社会学における重要な研究課題のひとつであり続けてきた。それははじめ、経済発展にともなう「過疎・過密問題」として研究されてきた。その中で、1990年代の半ば以降、新たな段階の経済のグローバル化の中で、地域的不均等発展とそれにとともなう地域社会の諸問題は、より一層の激化、先鋭化、深刻化がみられるようになってきたと言われている。とくに、経済のグローバル化から取り残されつつある地域では、これまでの単なる「過疎地」という用語では表現できないような厳しい現実が生じつつあると言われている。すなわち、消滅しかねない現状が生じつつあるというのであ

る。そうした地域社会は、「限界集落・地域」と呼ばれている。こうした現在の地域社会変動の様相を、経済評論家の内橋克人は、NHKのクローズアップ現代「故郷が消えていく」という番組で、2つの日本が生じつつあると評していた。

本稿は、そうした「限界集落・地域」と呼ばれるくらい厳しい現状にある地域社会の存続や再生を図る人々の活動に焦点をあてて、現下の経済のグローバル化の中でその活動はどのような意味をもっているものなのかについて考察することを目的としている。とくに、経済のグローバル化の下で厳しい状況に直面している地域社会に移住し、地域の方々と交流し、ともに自分たちが住み暮らしている地域社会の存続や再生を図ろうとしている「人」に着目してみようと思う。なぜならば、現代社会に特有な生き方である「個人化」的生き方⁽¹⁾の価値観や意識から見れば、見放され、切り捨てられ、そして放棄されてきたような地域社会に移住し、地域の方々と交流し、協力・協働して地域社会の存続や再生を図ろうとする「人」とはどのような人物なのか、なぜそうした地域社会に移住しようとしたのか、地域社会の方々とはどのような交流をしているのか、そしてそのような交流の中からどのような生活上の価値観や意識が芽生えているのかについて具体的にフォローしてみたいのである。

第一章 移住者に着目した地域社会再生の社会学の課題と方法について

はじめに、移住者に着目した地域社会再生の社会学的研究の課題と方法について明確化する作業を試みておこう。本研究は、人口増を図ったり、経済的発展を意図したりしてきた従来の地域活性化のための研究とは一線を画している。言うまでもなく、「個人と社会との関係」を解明することが社会学の主題であるが、本研究はその主題を正面に据えて、しかも実証的に探求しようとする研究の一つである。また、一般的に言って、社会学の視点から見れば、「個人と社会との関係」とは、「つくりつくれる関係」であると言える。すなわち、個人はその個人が所属している社会によって「つくられる」ことによってその社会の一員になっていくとともに、逆にそうした諸個人によって社会は「つくられる」とも言えるのである。この意味で、本研究は、社会学の主題である個人と社会との「つくりつくれる関係」を具体的・実証的に探求する研究に位置づくものである。では、移住者に着目した地域社会再生の社会学は、かかる社会学の主題を探求の正面に据えたとき、具体的にどのように研究していけばよいのであろうか。

本研究では、研究のための方法論として、まずジーン・レイヴとエティエンヌ・ウエンガーの「正統的周辺参加」の理論を参照したいと思う。周知のように、レイヴとウエンガーの「正統的周辺参加」理論は、「学習を内化として見るのとは対照的に、学習を実践共同体への参加の度合いの増加として見る」⁽²⁾という学習理論である。一般的に言えば、いわゆる学習理論は、学習者個人の学習行為による変容を研究対象とするもので、その個人が参加している社会の変容を研究対象とするものではない。そうだとするならば、学習理論を援用して個人と社会との「つくりつく

られる関係」は研究することができないということになってしまうのではないだろうか。この当然の疑問に対しては、レイヴとウェンガーの学習理論は「学習を（学習者の個人的な）内化として見るのとは対照的」な学習理論であり、社会学の主題でもある個人と社会との「つくりつくれる関係」を研究するための基礎理論にもなりえるものであると答えることができよう。

レイヴとウェンガーたち自身、「正統的周辺参加」の概念は学習が生じる状況的活動の理論と、社会的秩序の生産および再生産の理論をともに論じることのできる枠組みを提供しようとするものであると主張していた。さらに、彼ら自身のことばで、「正統的周辺参加概念」の、個人と社会の「つくりつくれる関係」研究にとっての含意を敷衍しておこう。状況的活動理論と社会的秩序の生産および再生産の理論は、「通常別々に、異なる理論的伝統の中で扱われてきた。しかし社会的実践の枠組みにおいて、それらの総括的且つ構成的な関係や、それらが含意することや効果を探求する共通の基盤が存在する。そこでは、人のアイデンティティ、実践における知性的技能および実践共同体の生産、変容、および変化が、日常の活動における関わり合いの生きた世界の中で実現するのである」⁽³⁾。実践共同体への参加を学習とみるレイヴとウェンガーの学習理論は、学習者のアイデンティティ形成の中に学習の展開を把握するとともに、その学習者の学習の展開過程そのものを学習者が参加した実践共同体の変容と変化を内包している生産と再生産過程として把握することを、この引用文は示唆しているのである。

しかし、移住者に着目して地域社会再生活動を研究対象としようとしている本研究においては、徒弟制度をモデルとした実践共同体への参加としてのレイヴとウェンガーの学習論をそのままの形では援用することができないのも事実のように思われる。まず、移住者の場合、参加する実践共同体とは何かということが問題となろう。徒弟制モデルの場合は、参加する実践共同体は一つの労働生活を実現していくための実践体である。しかし、移住者の場合、まず移住先となる新たに住むことになるコミュニティまたは自治体としての地域社会の一員となることを意味しているが、その地域社会はレイヴとウェンガーが言う実践共同体と言えるのであろうか。さらに、実践共同体への参加という視点から見ると、新たに住むことになるコミュニティまたは自治体としての地域社会の一員となるということは、現実的には参入する地域社会の中に存在する労働と生活をしていくための複数の諸実践共同体へ参加していくことを意味していると言える。このことから、移住者が参加することになる諸実践共同体間の関係性をどのように理解したらよいかという問題が生じてくることになる。

上記のことと関連して、「周辺の参加」から「十全的参加」へという学習過程の把握を、移住者の場合どのように把握していったらよいかという問題が起こってくる。抽象的な形でこのことに関するレイヴとウェンガーの議論を簡潔に要約しておくならば、「十全的参加」とは、学習者が参加することになる社会的実践共同体に対するアイデンティティを獲得し、一人前の構成員、すなわち参加する社会的実践共同体の一員になることであると言えるであろうか。そして、彼らが言う「『アイデンティティ』と私がいうのは、人が自分を理解する仕方であり自分を見る見方、

また他者からの見られ方、すなわち自分についてのかかなり安定した知覚である」⁽⁴⁾。また、徒弟制モデルでは、アイデンティティを獲得し、十全の参加者になることは、弟子として参加した学習者が、親方たちを自分たちの成長のためのモデルとして学習する過程において、『『あいう人たちになること』ということが具体化した到達点なのであり、……あらゆる複雑ないみにおいて(なのではあるが)、熟練のアイデンティティ』⁽⁵⁾〔()内は引用者による。以下断りが無い限り、下線や傍点による強調や()などは原文による。〕を獲得するまでに達したということなのである。

では、移住者が参加する地域社会の一員になる、すなわち「正統的周辺参加」から「十全の参加」に到達するということはどのようなことなのであろうか。形式論的に言えば、ある地域社会の一員になるということとは、かつての村落共同社会が実態としても存在し、よそ者がその社会の一員になるためには何らかの「村入り」の儀式を必要としていた時代とは大きく変化してしまった現代社会においては、法律的な意味で住民票を移しさえすれば法律的にはその地域社会の一員になったと言ってもよいはずである。移住者自身の成長モデルとなるような人の存在や、そのモデルとなる人が具現している何らかの熟練に到達することなどは必要でもないであろう。

そうした現代社会で、レイヴとウェンガーのいう「正統的周辺参加」理論を援用することでより適切に分析・理解できると思われる、移住者が参加する地域社会の一員となっていく過程とはどのようなものと考えられるのであろうか。本研究では、以下の二つの側面がそれに妥当する移住者の地域社会への参加過程であると仮定したい。その一つは、移住者が参加しようとしている地域社会の住民たちが、「これが私たちの社会である」という地域社会アイデンティティを共有化している場合である。この場合には、移住者もまた参加する地域社会の一員となるためにはそのアイデンティティを共有化することが強く求められよう。その共有化があってはじめて、移住者は、その地域社会の住民の人たちから受け入れられ、自分たちの社会の一員であることを認められることによって、「十全的」な意味で参加した地域社会の一員となることができたと言えるようになるのではないだろうか。二つ目の側面は、移住者が参加した地域社会への愛着を持ち、参加した地域社会の抱えている諸問題を自分自身の問題・克服すべき課題ととらえ、住民の人たちと協力・協働して解決していこうとするような動き・活動に参加するようになっていく側面である。一般的に言っても、社会は自らが抱えている諸課題を解決または克服するための担い手と彼らによる動きを生み出すと言える。そして、その動きと活動の中から新たな集団、組織、そして制度が創造されていくことになるのではないかと思われる。まさしく、その全過程こそ、その動きと活動に関係している人たちの間に、自分たちにとっての社会、自分たちの社会を形成しているという意識を生み出し、自分たちが参加している社会に対する共有化された集団的アイデンティティが新たに創造されていく過程であるといっても過言ではないのではなかろうか。さらに言えば、解決し克服しようとする諸課題の内容やその性格によっては、その全過程は、決して「幻想的」⁽⁶⁾ではない自分たちの共同社会建設の過程であるとするところのことができるような場合も期待で

きるのではないだろうか。

とは言っても、さらに指摘しておかなければならないことがある。それは、移住者と住民たちの協力・協働による地域社会の課題解決または克服の動きと活動は、常に協同的で調和的であるというわけではないということである。むしろ多くの場合、さまざまな対立や衝突などのコンフリクトが存在することになるであろうことが十分予測できるのである。レイヴとウェンガーの両者は、この点に関し次のように論じていた。その論脈を追ってみるならば、そしてその論脈を追うことが移住者が住民の人たちと協力・協同して地域課題の解決または達成を図って行こうとするような動きや活動を研究する場合、何をどのように検討しなければならないかを指示してくれるのであるが、まずなによりも「正統的周辺参加」概念とは、「変化する人格と変化する実践共同体の二つを生み出すことに内在する共通のプロセスについての主張」⁽⁷⁾であることを強調している。

その上で、「いかなる実践共同体でも、時間を通しての正統的周辺参加の個別の形態を理解するためには、共同体の再生産過程——実践者間の活動と関係の、歴史的に構成され、常に進行し、コンフリクトをはらみ、しかも共働的 (synergetic) な構造化——が読みとられなければならない」⁽⁸⁾ ことを指摘する。その際、レイヴとウェンガーの理解によれば、「学習過程に含まれているはずの社会的世界に関して、……私たちが重要だと考えるのは、共有化されている意味の文化的システムと政治-経済的構造が、一般的に、また、とくに実践共同体で学習が共同的にできあがってくるのをそのシステムが支援する際に、どのように相互に関連をもつかを考察することである」⁽⁹⁾ との分析と検討のための方向性を示している。

そして、次のように主張を展開する。このように「学習を社会的な視点から眺めることによって得られる洞察の一つは、学習のプロセスおよび社会的再生産のサイクルが、両者相互の関係と同様に、問題をはらんでいるということである。これらのサイクルは社会的実践やアイデンティティの形成には必ず伴う矛盾や闘争のなかで立ち現れる。新参者にとっての意味と、新参者の参加の増大による古参者にとっての意味には根本的な矛盾がある。なぜなら、十全の参加への向心的発達、またはそれに伴っての、実践共同体の成果ある生産は、同時に、古参者の交替をも意味しているからである。この矛盾は正統的周辺参加としての学習には本来的に含まれている。なぜなら、様々な形態をとり得るにしても、競合的關係は、生産の組織においても、あるいはアイデンティティの形成においても、明らかにこれらの緊張を高める働きをもつからである」⁽¹⁰⁾（下線による強調は引用者による。）と。

上の引用文において、今後の実証的研究において、とくに新参者と古参者との、または新参者同士の、さらに古参者同士の間のコンフリクトの形を分析・検討する際のキーワードとなるのは、下線によって強調した「競合的關係」ではないだろうか。しかも、「競合的關係」は単に経済的、政治的關係においてのものだけでなく、まさしく当該の地域社会の共有化されている社会的アイデンティティをめぐっても内在しているものと考えられるのである。レイヴとウェンガーたちも

この点に焦点を当てており次のように論じていた。その「競合的關係」は、「実践共同体の構造とその生産および再生産に関する問題」⁽¹¹⁾ すべてに関わるのであると。

さらに、本人たちのことばでそのすべての競合的關係問題を敷衍しておくならば、そのすべての問題とは、「すなわち、学習者が進行中の活動にアクセスする構造と、技術の透明性、社会的関係、さらに活動の形態についての問い。あるいは、参加の分節化、分配、および相互調整と、特定の共同体内の部分的で、絶えず増大し変化する参加の正統性に関する問い。さらには、その特徴的なコンフリクト、利害、共通の意味、交差する解釈、および、変化する参加とアイデンティティに直面するすべての参加者の動機づけに関する問い」⁽¹²⁾ などである。

ここまで、個人と社会との「つくりつくれる関係」という社会学の視点から、移住者に着目した地域社会再生の研究法について検討してきた。その中で、本研究では、移住者（レイヴとウエンガーのことばによれば新参者）の正統的周辺参加から十全的参加への移行過程（レイヴとウエンガーのことばによれば学習過程）における移住者のアイデンティティ形成の問題が重要な課題となっていたことが確認されてきた。しかしそのアイデンティティ形成論は、主として新参者の参加する実践共同体に対するアイデンティティ形成に関わるものであった。移住者に着目する本研究においては、そうした意味でのアイデンティティ形成の問題はもちろん重要な課題であるが、同時に移住者個人にとってのパーソナルなアイデンティティ形成に関わるアイデンティティ形成論の視点も重要であるように思われる。なぜならば、移住者とは、それまで生まれ育ち、または生活してきた地域社会を離れ、新たな社会への参加をしようとする人たちであるからである。それゆえ、移住者に着目する場合、彼ら・彼女らの移住動機とともに、その移住が彼ら・彼女らにとってどのような意味をもつものなのであるかについても焦点が当てられなければならないと考えられる。本研究では、この側面でのアイデンティティ形成論を現代社会における生き方論の中に位置づけて分析・検討していきたいと考える。

その意味で、本研究は、マネー・ゲーム的資本主義のグローバル化の進む現代社会における「他者と共に生きる生き方」探究の社会学という位置づけにもなるのではないかと考える。この社会学の視点から言えば、「他者と共に生きる生き方」は、大雑把に以下の3つの生き方に分類することができる。第一の生き方は、とくに現代社会に特有の生き方で、「個人化」的生き方と呼ばれているものである。この生き方は、他者との関係性で言えば、たとえ同じ社会のメンバー同士であっても、ただ単に生活空間と生活時間を共有しているだけで、それぞれバラバラに、むしろ他者と競争し、自分だけの利益を追い求めることを第一義的な生活目標として生きているような生き方である。それでもいわゆる他者と一緒で生活をしているという意味で、「他者と共に生きている」と言えるのかもしれない。第二の生き方は、その第一の生き方とは正反対の生き方であり、ある意味で自己を犠牲にして他者のために、他者の利益のために生きる生き方である。いわゆる慈善的、ボランティア的生き方である。例えば、困っている人たちを助けたり、支援したりする生き方であると言えるかも知れない。そして、第三の生き方は、他者と力を合わせ、協力し、協

働的に生きる生き方であろう。いわゆる協同的生き方がそれである。ただし、この第三の生き方は、必ずしも第一の「個人化」的生き方と全く性格の異なる生き方であるというのではない。「個人化」的生き方であっても、その範囲とつながりの強さから言えばより限定的かもしれないが、自己の利益をよりあげるために誰かと協同的關係を結ぶことはよく見かけられることがらであろう。

こうした生き方のうち、第一の「個人化」的生き方は、格差と貧困、社会的選別と差別、排除を不可避的に生み出しつつ地球的規模で拡大している現下のマネー・ゲーム的資本主義の下では、さまざまなリスクや病理につながる生き方になってしまうかもしれない恐れにさらされている。「個人化」的生き方は、今や、誰ともつながりがもてず、誰にも相談も、助けも求めることができないうちで孤立死・孤独死するか、または自殺をしてしまうというような悲劇の増大、孤立感の中での他者攻撃的な行動や犯罪の頻発、さらにフリーターやニートとして滞留し、経済的にも貧困化していく若者の増大など、さまざまな社会的・個人的問題発生の大きな要因となっているように思われるのである。

こうした現状の中で、他者から孤立するのではなく、他者と交流し、より協同的に生きる第三の生き方は果たして可能なのであろうか。その可能性を探究しようというのが本研究の課題の一つである。そして、消滅するかも知れないと言われるほど厳しい現状にある地域社会の存続や再生を図る動きを研究対象とすることによって、この課題を探究してみようというのである。では、厳しい現状にある地域社会の存続と再生を図る動きと協同的生き方の可能性探究とは、どのように関係するのであろうか。

第一は、消滅しかねないくらい厳しい状況にある地域社会を存続・再生するという事業は、単なる個人や当該の地域社会の人たちだけでは不可能とまでは言えないかもしれないが、かなり難しい事業ではなかろうかということに関係している。すなわち、その事業は、より多くの人たちの活躍、交流、協力と協働、そしてそれらの方々の社会的ネットワークが形成されてはじめて実現していくような性格をもっているのではなかろうか。まさしく、その事業の中には、協同的な「他者と共に生きる」生き方が、さまざまな形をとって生み出されていることが予想されるのである。

第二は、消滅をしかねないくらい厳しい状況にある地域社会とは、「個人化」的生き方の背後にある生活上の価値観や意識からは見捨てられ、切り捨てられ、放棄されてきた社会なのではないかという認識と関係している。もしそうした認識が当たっているとすれば、そうした地域社会を存続させ、再生させていこうとする事業は、現代社会に特有の利己的で、「個人化」的な生活価値観や生活意識とは異なった、むしろそれらのオルタナティブな生活価値観や生活意識という意味での新しい生活価値観や生活意識を創造している可能性を大きく孕んでいると思われるのである。しかも、それらの生活価値観や生活意識は、排除型的社会ではない、より包摂的な社会形成の理念形成にもつながる可能性を有していることが大いに期待できるのである。

以上のような仮説の下、さらに厳しい状況にある地域社会の存続と再生に果たす移住者個人の役割にも注目するというのが本研究のもうひとつの視点であった。すでに述べてきたように社会

学の視点によれば、個人と社会との関係性のひとつの側面は「つくりつくれる関係」であった。すなわち、一般的に言えば、社会は、諸個人の日常的な生きる営みの中で創り、再生産されるとともに、諸個人は社会によって不断に創られ、新たな自己形成を遂げていっているのである。その関係性を、具体的な社会の中の、具体的な諸個人を対象として、実証的に研究する場合、その研究方法のキーワードは、「出会い」ではなかろうか。個人と社会との関係における「つくりつくれる関係性」から見れば、個人の人生とは、その個人が生まれてから死ぬまでの間に積み重ねられる「出会い」の物語であると言えるように思えるのである。新たな「出会い」こそが、新たな社会の中での新たな人生と新たな自己アイデンティティの形成の契機なのではないだろうか。

周知のように、この「出会い」をキーワードに、個人のライフサイクルにともなう社会学的発達論を展開したのが、エリクソン夫妻であった。その際、個人と社会との「つくりつくれる関係性」の視点から言えば、「出会い」は、まず個人と個人がその中で生きようとしている社会との「出会い」であり、次に、その社会の中で生きていく中で「ともに生きる」ことになる他者との「出会い」である。しかし、個人の側から見ても、また社会の側から見ても、すべての「出会い」が意味ある「出会い」である訳ではなく、とくに決定的に重要な「出会い」というものがあるということである。同時に、注意しておかなければならないことは、これも個人にとっても、社会にとっても、すべての「出会い」がすばらしく、「よい」「出会い」である訳ではないということである。

これらのことを、ここではそれが本研究の目的ではないので簡潔にはあるが、エリクソン夫妻自身のことばで確認しておくことにしたい。まず、個人とその個人にとって重要となる他者との「出会い」に関してである。一般的に見たとき、この点での典型は、すべての個人にとって重要なライフイベントである出生時の母親との「出会い」ではなかろうか。エリクソン夫妻いわく、「生まれたばかりの、無力に横たわる乳児は、彼の顔を覗き込み彼に反応を示す母親的人物の顔を、見上げ、探すようになる。精神病理学の教えるところでは、この『目と目を合わせる関係』(eye-to-eye relationship) (J.Erikson,1966) は、人間の精神的発達に不可欠な『対話』であるばかりか、口と乳房の関係が生命維持に不可欠のように、人間の存在そのものに不可欠な対話でもある。母性的世界と『接触』する能力の基本的欠如は、まず、この目と目を見合わせることの欠如として現われてくるという。しかしこの種の接触が確立された場合でも、人間はなお見上げる人物を常に探し求め、自分を『抱き上げてくれる』出会いによって自らの存在が確立される感覚を一生涯求め続ける。最初の対人的出会いを演出する、この遊戯的なしかし(系統発生的に予定された)対話においては、目の光、顔の相貌、名前を呼ぶ声が、原初的他者に関する最初の認知及び原初的他者による最初の認知の本質的構成要素となる」⁽¹³⁾と。

以上のような母親との出会いこそ、他者にたいする「基本的信頼感」という個人の精神発達のその後の土台を形成するような重要な出会いに他ならない。さらに、エリクソン夫妻によれば、

個人のライフサイクル上における「第二の人生の誕生」とも言えるアイデンティティ形成にとっても、「出会い」は決定的に重要な契機である。とくに、「様々な『確証』の中で自分自身の輪郭を見出す時に、また、芽生えはじめた友情や愛や協力関係やイデオロギ的結社への傾倒を徐々に深めていく中で自分自身の輪郭を見出す」⁽¹⁴⁾ 青年期の時期の出会いは重要である。すなわち、その出会いとは、お互いの「個性化」と「自己実現」を相互に承認し合い、支えあえるような他者との出会いである。そうした出会いをエリクソン夫妻は、「第二の個性化」と呼び、次のように論じていた。「この第二の個性化は、他者の個性化に対する尊敬や承認と、他者の自己実現を促しかつ他者から自己実現を促されるという相互的な実現（mutual actualization）を意味する友情や提携の能力が、徐々に増大していくことを含んでいる」⁽¹⁵⁾ のであると。

社会生活における個人のアイデンティティ形成においては、上述のように、まず「第二の個性化」を相互に承認し、支え合うことができるようなパーソナルな出会いと交流が重要なことは言うまでもない。エリクソン夫妻によれば、社会生活における個人のアイデンティティ形成のためには、さらに、その「第二の個性化」がその個人が生きようとする社会の中で花開き、実現し、社会の中で共同的に承認され、支えられることも重要な要素であると言う。なぜならば、社会生活における個人のアイデンティティの形成過程とは、「『私』（I）と『他者』（Other）という両極性に対する……確証（過程であり、また）……我々がヌミノーシクナルモノ（the numinous）（つまり神聖な存在のオーラ）と呼ぶひとつの遍在的要素に対する人間の儀式的欲求並びに審美的欲求の基盤を成すものである。このヌミノーシクナルモノは、分離性の超克（separateness transcended）と個別性の認可（distinctiveness confirmed）を保証し、それによって『私』という感覚の基盤そのものを保証する」⁽¹⁶⁾ 過程に他ならないからである。

こうした社会生活における個人のアイデンティティ形成を経て、個人は、社会学的な精神生活の発達目標である「統合的」生き方を手にすることができるのである。そしてそれは、次のような出会いを意味してもいるのである。エリクソン夫妻いわく、「何らかの統合感だけが物事を一つに結び付けることができる。ただしこの統合は、個人の人格に備わるひとつの希有な特質を意味するだけでなく、人間の統合的な生き方を理解しようとする共同的な傾性、あるいはそれを理解している人の言葉を『傾聴』しようとする共同的な傾性を意味することもできる。それは、素朴な制作物や言い伝えの中に表現されているような、遠い時代に異なる営みの中で生まれた秩序化の仕方との、同志的連携（comradeship）である。そこにはまた、人生の極めて重要な文脈の中で主要な相互交渉の相手となった少数の『他者』に対する、時間を超えた愛も生まれてくる。なぜなら、個人の人生はただ一つのライフサイクルとただ一つの歴史的の局面との偶然の出会いであり、あらゆる人間統合は、個人が共有するひとつの共同的な結合様式と生死を共にするものだからである」⁽¹⁷⁾（下線による強調は引用者による。）と。

以上の個人のアイデンティティ形成に関するエリクソン夫妻の議論を、「地域社会再生論」の文脈、すなわち移住者と移住者の人が「偶然」出会うことになる社会およびその社会の中の他者

との出会いの物語の文脈の中に位置づけて理解し直しておこう。まず、移住者と移住先となる地域社会の出会いでは、移住者がその社会および社会内の他者から受け入れられ、支えられるという側面が重要となろう。そして、その過程を通して、次に、移住者が移住先の社会への愛着とアイデンティティの形成という側面があろう。その中で、移住者は、その地域社会再生活動に何らかの形で関わりをもち、他の人々との関係性を豊かに築きながら、自己の社会的役割を見出していくという側面が生まれてくる。そして、この局面では、移住者は、ただ単に移住先の社会やその住民の人たちに支えられるだけでなく、逆に移住先の社会やその住民の人たちを何らかの形で支えるという側面こそが重要となろう。この一連の過程を経て、移住者は、移住先の地域社会の一員となってだけでなく、新たな自己のアイデンティティの形成と確証、そして「統合的」生き方を獲得していくことになるものと考えられるのである。この一連の過程は、移住者の側の視点から見れば、自分の生活する場を見出したというだけでなく、「第二の人生の誕生」物語と言っても過言ではないのではなかろうか。

本章の最後に、竹富島における移住者の事例研究というただ一つの実例研究を位置づけるための議論としては、ここまでの議論は少々よくばりすぎているのではないかと思われるかもしれない点について言及しておきたい。この点で、まず言及しておかなければならないことは、本章の議論は、竹富島の事例だけを位置づけるためのものではないということである。先にも言及していたように、竹富島の事例研究は、「移住者に着目した地域社会再生の社会学」的研究の第一歩にすぎない。今後、竹富島以外の沖縄・九州の諸事例、東北および北海道の諸事例、そしてスコットランドの諸事例などの比較社会学的研究を行っていくことを予定している。本章は、そうした比較社会学的研究を念頭においたものであった。

本章の議論がよくばりすぎているように見えることは、「移住者に着目した地域社会再生」研究の社会学的課題が多岐に渡っていることを反映しているからでもある。「移住者に着目した地域社会再生」研究には、まず、異文化の接触と交流、摩擦と対立という社会的相互作用に関する研究という側面がある。また、異文化の接触と交流による相乗性と創発性研究という側面があろう。

第二に、「移住者に着目した地域社会再生」研究には、現代社会における地域移動の社会学的研究という側面がある。周知のように、近代以降の社会における地域間移動とは、一般的に言えば、農村的社会から都市的社会への移動を意味している。しかも、そうした人々の地域間移動は、いわゆる「過疎・過密」問題といわれている地域間不均等発展を生み出す要因ともなってきたのである。さらに、そうした人口移動の不均等性の背後には、農村的地域社会と都市的地域社会の間に経済的な不均等発展があることもよく指摘されてきたところである。例えば、弘前大学人文学部付属雇用政策センターによる調査結果にもとづいて極最近の2012年に出版された『『東京』に出る若者たち——仕事・社会関係・地域間格差』（ミネルヴァ書房）の中でも、地方の若者たちの東京への地域間移動を説明する論理として、移動のコストを超えてえられると期待できる経済

的利益という「経済の論理」が採用されていた。しかし、本研究で対象としている移住者たちの地域間移動は、上述の地域間移動とは全く逆方向の地域間移動である。しかも、ますます経済至上主義的な傾向を強めている経済のグローバル化が支配している現代社会においてなのである。では、本研究で対象となる移住者たちの地域間移動を説明する論理とは何であろうか。少なくとも、その論理は「経済の論理」ではなかろう。本研究の主張は、それは「社会学的論理」にあるというものである。そして、本研究では、さらに「社会学的論理」の中でライフスタイルの論理を重視するという視点に立っている。

第三に、「移住者に着目した地域社会再生」研究には、現代社会における定住研究という側面がある。経済のグローバル化が支配している現代社会における人の住居地にたいする基本的なスタンスの性格は、コスモポリタンというものではなかろうか。その上で、多くの人たちにとって、現在の居住地は、たまたま「生まれ育った地」だから、「通学のための地」だから、そして「仕事のための地」だから住んでいるというある意味で「偶然的」要因によって住んでいるところというものではなかろうか。本研究が対象としている移住者たちの彼らの居住地との関係性は、そうした「偶然的」要因とはその性格を異にしているように思われる。すなわち、移住者たちにとって自分が居住している地は、彼らの自覚的な選択によって選び抜かれた地という性格を持っているのである。さらに言えば、移住者たちにとって自分たちの居住地は、彼らの自分自身に対するアイデンティティの核の部分に位置づいているのではなかろうか。そうした性格を有している定住は、自分たちが居住している地域社会を自分たちの社会として形成していこうとする方向につながっていく可能性がより孕まれているのではないだろうか。

以上ここまで簡単にはあるが見てきたように、「移住者」に着目する「地域社会再生」研究は、まさしく地域社会学にとって豊饒な課題性を孕んでいるのである。そのことをあらためて確認し、次に、いよいよ竹富島ではどのような物語が紡がれてきたのかを具体的に検討する作業に移ることにしよう。

第二章 竹富島における「観光化」の展開史

移住者に着目して地域社会再生の動きを社会学的に研究することを目指している本研究では、対象となる地域社会のレイヴとウェンガーのことばによれば「社会的世界」をどのように理解するのが重要となろう。第一章で検討してきた研究方法との関係で言えば、とくに以下の問いが重要であるように思われる。その第一の問いは、対象となる地域社会が直面している地域課題とは何かというものであり、第二の問いは、対象となる地域社会の住民たちによって社会的に共有化されている自分たちの社会に対するアイデンティティが存在するかどうか、そしてもし存在するとするならばそれはどのようなものであるのかというものである。この二つの問いにどのように答えるのかで研究の方向性も決まってくるであろう。

では、竹富島を事例とする本研究の場合は、上記の二つの問いにどのように答えるのであろうか。結論だけを述べておこならば、竹富島の場合は、第一の問いに対する答えは、地域経済の柱である「観光化」への対応という課題を重視したい。第二の問いに関しては、本研究では、住民の人たちが「うつぐみの精神」と呼んでいる竹富島社会の協力・協働の生活上の精神風土であると答えておこうと思う。そして、次に、この地域課題への対応と精神風土がどのように絡み合いながら展開し、現在に至っているのかということ、ごく簡潔に検討していくことにしよう。

竹富島は、沖縄的な赤瓦と白い歩道のコントラストが美しい家並みの景観により、現在沖縄県八重山地方の離島観光のメッカとなっている全国的にも有名な観光地である。人口約350人強の小さな島に、最高時には年間40万人を超える観光客が訪れたと言われている。同時に、竹富島は、住民の人たちの協力と協働の力によって自治的に地域づくりをしている島としても、全国的に有名である。その協力と協働の力と精神は、「協力一致（うつぐみ）」の精神と呼ばれている。とくに、1972年の沖縄の日本への復帰以降、本土へ資本による土地買収の嵐の中で、竹富島の人々は、自分たちの土地は自分たちが守るという運動によって本土資本による土地買い占めを阻止し、自分たち自身の手による地域づくりへという展開の中に、その「うつぐみ」の精神が大きな役割を果たしたといわれている。

竹富島のそうした地域づくりは、「竹富方式」として定式化され、全国に知れ渡っている。そして、その「竹富方式」の地域づくりは、竹富島の人々が定めた「竹富島憲章」にあますところなく表現されていると言われている。「竹富島憲章」は、「私達は、祖先から受け継いだ伝統文化と美しい自然環境を誇り『かしくさやうつぐみどうまさる』の心で島を生かし、活力あるものとして後世へ引き継いでいくためにこの憲章を定めます」という書き出しで始まる。「保全優先の基本理念」として、「売らない」、「汚さない」、「乱さない」、「壊さない」、そして、「生かす」という5つの理念がうたわれ、次のように敷衍されている。すなわち、「私たちは、古琉球の様式を踏襲した集落景観の維持保存につとめます。私たちは、静けさ、秩序ある落ち着き、善良な風俗を守ります。私たちは、島の歴史、文化を理解し教養を高め、資質向上をはかります。私たちは、伝統的な祭りを重んじ、地場産業を生かし、島の心を伝えます。私たちは、島の特性を生かし、島民自身の手で発展向上をはかります」と。

そうした「憲章」に基づいた竹富島の「竹富方式」による地域づくりは、さまざまな研究分野の研究者を魅了してきた。そのため、数多くの研究者により、研究され、高い評価を受け、そして全国に紹介されてきた。ところが、近年、その竹富島が、「竹富方式」による地域づくりを揺るがしかねない諸問題の発生によって大きく揺れてきた。その代表的な諸問題が、竹富島の人と本土のリゾート会社が組んで開発しようとしてきた「リゾート開発」問題である。すなわち、竹富島東部の海岸線6.7ヘクタールの土地に赤瓦の屋根の木造コテージ50棟を建設するという開発計画であった⁽¹⁸⁾。この開発計画では、その土地を所有する「竹富島土地保有機構」が本土のリゾート会社から借金した資金によって開発が進められることになっている。「その返済総額は、

12億円余。これを12年間で返済する計画」⁽¹⁹⁾であった。この「リゾート開発」問題は、そのような「借金」問題のほか、竹富島の既存の宿泊施設である民宿との共存問題、自然環境との共生の問題が孕まれている。しかし、さまざまな経緯を経て、2012年5月にすでに完成し、営業を開始している。

そこで、ここでは、竹富島の「観光の島」としての地域づくりのこれまでの歴史を簡単に振り返っておこう。竹富島が「観光の島」として生きていくという方向性は、沖縄の本土復帰の時期に八重山地方を襲った干ばつと台風により、従来の産業（竹富島の場合は黒糖生産）が壊滅的な打撃を受け、復興の見込みがなくなったことによって定まったと見てよい。すなわち、竹富島の人は、上記の自然災害を乗り越える道として、従来の黒糖生産にかわり、観光産業で生計をたてていく道を模索していくことになったのである。ただし、その道は、決して平坦な道ではなかったと言える。

これまでの、その過程を、竹富島の「観光の島」としての地域づくりを、島内でその地域づくりにたずさわってきた立場から全国にむけ情報を発信しつつけてきた、喜宝院蒐集館長・上勢頭芳徳さんのことばを借りて、まとめてみようと思う。上勢頭さんによれば、干ばつと台風という自然災害により、産業上・生活上大きなダメージを受け、その復興の道を模索していた時期、すなわち、「一九七二年の本土復帰の頃、土地買占めが横行しました。『島外者に土地が買われたら島の自然・文化が変質し崩壊する』と危機感を持った人が立ち上がり、土地の買占め売渡し反対運動を展開しました。そのとき、『妻籠宿を守る住民憲章』を参考にして『竹富島を守る憲章(案)』をつくりましたが、このような住民の真摯な運動をマスコミが報道し続けてくれ、企業の侵出を抑えることができました」⁽²⁰⁾。そして、「その後、住民の意思を明確に表すために明文化することになり、竹富島憲章制定委員会を設けて原案を検討し、公民館議会で修正し、一九八六年三月三十一日の住民総会において、竹富島憲章は満場一致で決議採択され」⁽²¹⁾ることになったのである。

その結果、その「憲章のおかげで島の心と景観が守られており、それが竹富島の観光資源となっています。今では年間三五万人程の観光客が来島し、雇用の場が出てきたことで、Iターン・Uターンの若者が増え、結婚出産が相次ぎ、一四年連続人口増加中です。伝統的な赤瓦の住宅も、昨年は^(マ)四件増えました。竹富島はベビーブーム・新築ラッシュです。まさに島の伝統文化が経済を救い、穏やかに地域を活性化しています」⁽²²⁾という状況が生み出されているのである。しかし、同時に、そうした状況は、他方では、「Iターン・Uターンの新住民だけでなく、これまで島で生活してきた人々も、竹富島憲章と『うつぐみの心』の関わりを考える必要がある」⁽²³⁾というような事態も生じさせているのではないかということの指摘も、上勢頭さんは忘れてはなかったのである。

以上のような観光産業を基軸とした地域づくりの展開を、竹富島を訪れる観光客数の推移に着目してフォローしておくならば、1990年代初期の時期には、竹富島は、すでに、人口300人強の小さな島に年間10万人を超える観光客が訪れるまでの「観光の島」になっていた。その時期こそ、

先に参照した上勢頭さんが竹富島の観光産業を土台とした地域づくりを語る中で、「観光客が来島し、雇用の場が出てきたことで、……人口増加」が始まったと言及していた時期であった。しかも、その後、竹富島を訪れる観光客数の伸びは、めざましいものがあった。1990年代の末には、竹富島を訪れる観光客数は、20万人を突破し、その数年後には、30万人を突破し、そして、著者が調査のためにはじめて竹富島を訪れた2007年には、40万人台を突破し、1年間に40数万人の観光客が、人口350人前後の小さな島に押し寄せるまでになっていた。

竹富島におけるそうした観光客数の急速な伸びは、2000年7月の沖縄サミットや2003年3月に放映が開始されたNHK朝のドラマ、「ちゅらさん」による沖縄・離島ブームによる後押しの影響が大きかったと言われている。しかし、そうしたブームは、2008年下半期に起こったアメリカ発の世界的規模での金融危機の影響を受け、雲行きがあやしくなった時期もあった。例えば、2012年1月12日の八重山毎日新聞は、2011年の石垣空港の乗降客数について次のような報道をしていた。すなわち、「石垣市空港課がまとめた石垣空港の2011年の乗降客数は153万1509人で、前年を16万1437人(9.5%)下回り、5年連続前年割れとなった。ピークの06年から5年間で42万6865人(21.8%)減少、ほぼ9年前の02年の水準となった」⁽²⁴⁾ことを伝えていたのである。ただ現在は、そうした状況は、その後の新石垣空港の開港によってかつてのピーク時を超えるまでになっているところである。

以上が、本土復帰以降の竹富島における現在も進行中の「観光化」の経緯である。以下、これを踏まえ竹富島に移住し、広い意味で竹富島社会の一員として生活している「人」の、竹富島社会との関わりの物語について見ていこうと思う。本研究では、移住してきた「人」の、移住してきた時期、竹富島社会との関係のあり方、社会的距離および社会的性格の違いに着目して3人の人物の移住と定住の物語について検討してみようと思う。

【註】

- (1) ここでいう「個人化」的生き方とは、現代社会を「リスク社会」としての「後期近代社会論」として把握するベックなどの議論を敷衍して使用している。それらの議論においては、近代社会の個人主義化の光の側面よりは、「予測不能性」、「不安定性」、そして「リスク性」などの個人主義化がもたらすより影の側面に焦点が当てられている。そのため、本研究では、そうした性格を表現するものとして括弧つきで「個人化」と表記している。ベックらの議論に依拠しながら、例えば乾彰夫は、現代日本社会で社会問題となっている若者の失業、ニートやフリーター問題の研究を行っている。その際のキーワードが「個人化」的生き方である。詳しくは、乾彰夫『<学校から仕事へ>の変容と若者たち—個人化・アイデンティティ・コミュニティ—』青木書店、2010年を参照してほしい。
- (2) ジーン・レイヴ・エティエンヌ・ウエンガー『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』佐伯胖訳、産業図書、1995年、25頁。
- (3) 同上、21～22頁。
- (4) 同上、62頁。
- (5) 同上、67頁。
- (6) マルクスは、階級分裂と階級支配が存在している国家という社会制度は、国民たちが相互に協働し、協同し

て支え合う真の意味での共同社会ではなく、「幻想共同体」でしかないと論じていた。そうした性格をもっている国家に対して、コミュニティや市町村などの基礎自治体は、真の共同社会に近づくことのできる可能性により富んでいると言えるのではないだろうか。

- (7) ジーン・レイヴ・エティエンヌ・ウエンガー，前掲書，33頁。
- (8) 同上，33頁。
- (9) 同上，31～32頁。
- (10) 同上，34～35頁。
- (11) 同上，33頁。
- (12) 同上。
- (13) E.H.エリクソン・J.M.エリクソン『ライフサイクル，その完結＜増補版＞』村瀬孝雄・近藤邦夫，みすず書房，2001年，47～48頁。
- (14) 同上，144頁。
- (15) 同上，145頁。
- (16) 同上，55頁。
- (17) 同上，86頁。
- (18) 2008年7月11日付八重山毎日新聞記事。
- (19) 2008年7月6日付八重山毎日新聞記事。
- (20) 『星砂の島（第10号）』全国竹富島文化協会発行，2006年8月，16頁。
- (21) 同上。
- (22) 同上。
- (23) 同上。
- (24) 2012年1月12日付八重山毎日新聞記事。

The Development of Tourism and the Stories of Newcomers in Taketomi Island (1)

—Examining the Newcomers' Contributions to the Development of Tourism in Taketomi Island—

UCHIDA Tsukasa

Abstract

A lot of social problems have arisen from unequal and unbalanced regional development under the globalization of modern capitalism. The problem that a lot of communities and local societies have been declining and facing the crisis of disappearing by depopulation is one of those problems. One of important tasks of sociological area studies is to make fundamental policies for settling the problem.

I have researched such kinds of communities and local societies specially in Hokkaido, Tohoku and Okinawa areas for many years. I have also found that a lot of newcomers from big cities had lived in such communities and local societies and that they had played a large number of important roles to develop and strengthen their communities and local societies against the declining and disorganizing tendencies of their communities and local societies. Why have they moved into such declining and disorganizing communities and local societies from big cities? Why have they been able to contribute to the developing and strengthening works? What kinds of social interactions have been there between the newcomers and old residents in the works? I intend to answer such questions in a series of articles. In this article I intend mainly to examine some theoretical ways of this research.

Keywords: newcomers, encounter, community and social identity

(うちだ つかさ 札幌学院大学人文学部教授 生活構造論)